世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『屋根うらべやへ』

第 12 話

制 作　日本アニメーション
　　　　フ ジ テ レ ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第十二話「屋根うらべやへ」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
バロー弁護士
ベッキー
ピーター
マリエット
モーリー
ジェームス
ラビニア

ロッティ
アーメンガード
ジェシー
ガートルード
エミリー（人形）
ジャンプ（小馬）
シーザー（猫）
ボナパルト（オウム）

1

ミンチン女学院

ミンチン「セーラ！」
いきなりセーラの花の王冠を摑み捨てる。
ミンチン「お前はもうダイヤモンドプリンセスなんかじゃないし、この学校の代表生徒でもありません……学校を出て行くんです」
茫然と見上げたセーラ、飜えるとドアを飛び出す。
――騒然となる女生徒たち。
――泣き出すロッティ。
ミンチン「静かに！……静かにするんです！」

2

同・三階の階段

――夢中で駆け上って来るセーラ、自室のドアへ飛び込む――

3

同

暖炉の上の父母の写真――を、そっと手にとるセーラ、涙が溢れる。

セーラ「……お父様が……お父様が亡くなったなんて……」

崩れるようにベッドの前に坐り込む。

ベッドの上に無心に坐っているエミリーをとり、抱きしめる。

セーラ「エミリー、聞いて？……お父様が……お父様が……私、そんな事信じられない……いえ、信じたくない……」

――わっとベッドに泣き伏す。

（以上十一話よりモンタージュ）

4

同・食堂

騒然と囲む女生徒たちの中で、ミンチンが、呼びつけた
モリーとジェームスに、

ミンチン「モリー、ジェームス……あの娘（ムスメ）の為に開かされたこの馬鹿
馬鹿しい誕生パーティは、中止する事にしました。直ぐに
ここを片附けるように……」

モリー「は、はい、院長先生……」

唖然と顔を見合せるモリーとジェームス。
ミンチン、騒然たる女生徒たちに、

ミンチン「騒ぐんじゃありません！　あなた方は自室へ戻って！　判
りましたね！」

決めつけると足早に出て行く。

アメリア「お姉様……！」

慌てて追うアメリア――
女生徒たち、再び騒然とドアへ向う。
その中で、泣くロッティと、うろたえるアーメンガード

――

ロッティ「やだよ、やだよ……セーラ・ママが追い出されるなんてやだァ……」

アーメンガード「（泣顔）泣かないで、ロッティ……私だって……私だって泣きそうなのよ……どうすればいいの……」

ニヤリとジェシー、ガートルードを見るラビニア。

ラビニア「フン、セーラが学校を追い出されるなんて、いい気味よ……追い出される所を見てやりたいわ」

5 同・三階への階段

上って来るバローとミンチン――

バロー「では、父親の件は、すべてあの娘に伝えて貰えた訳ですな」

ミンチン「勿論ですとも！……あの娘が自分の部屋に逃げ込んだりしなければ、もっと手厳しく云ってやる所でしたわ」

バロー「結構結構……お蔭で私の方も、次の手続きがとりやすくなりますわい」

ミンチン「次の手続きですって？」

6

同・三階の廊下

バロー、ミンチンを見る。

バロー「ミンチンさん、私は、死んだクルーのロンドンでの代理人ですぞ……残された財産、つまりあの娘の持物全部を処分する手続きが必要なんです」

ミンチン「なんですって？」

バロー「先日お話した通り、私は破産したクルーに、莫大な投資をしておった。つまり、私は債権者として、クルーの財産、あの娘の持物を没収する法律上の権利がある」

ミンチン「そ、そんな……」

バロー「では、財産を確認させて貰いますぞ」

バロー、セーラの部屋のドアへ行き、ノックする。

7 同・寝　室

ノックの音に――　はっと泣き濡れた顔をあげるセーラ。

8 同・セーラの部屋の前

ノブをガチャガチャさせるバロー。

バロー「フン、鍵までかけおって」

ミンチンを振返る――

バロー「合鍵をお持ちですな」

ミンチン「え、ええ……」

鍵を出す――　バロー、受け取って鍵穴に合わせる。

9

同・セーラの部屋

寝室からエミリーを抱いて出て来るセーラ、急いで涙を拭う。

ガチャガチャとノブの音がして、ドアが開き、バローとミンチンが入って来る。

バロー「ほほう……メソメソ泣いとるかと思ったが、そうでもなかったな」

無言で二人を見返すセーラ。

バロー「お前がどんなに不倖せな事になったか、院長先生から聞いとるはずだな」

セーラ、微かに頷く。

バロー「よろしい……私は、死んだお前の父親に大金を貸しとったんだ。そこで、その貸金の代りに、お前の持物全部を引上げさせて貰う事に、院長先生と決めたんだよ」

セーラ、凝然とバローを、そしてミンチンを見返す。
ミンチン、なにか云いかけそうになるが、撫然となる。
バロー、本箱へ行き、値踏みするように確かめる。
バロー「どうです、ミンチンさん……たかが子供に、こんな高そうな本ばかり買い与えるとは、親馬鹿にも程がありましたぞ」
バロー、振返って安楽椅子に来ると、乱暴に突き動かす。
バロー「それに、この安楽椅子……」
茫然と立尽すセーラの顔に、バローの声が次々にかぶる。
バローの声「あのぜい沢な勉強机……」
——勉強机。
バローの声「椅子とテーブルに、ソファ……それに、ジュータン……」
バロー、壁の絵を見る。
バロー「それに、この絵……」
ミンチン「バローさん！　その絵は当学校の備品でございます！」
バロー「や、そうでしたかな……では、寝室を拝見しますぞ」

10 同・寝室

エミリーを抱き、脅えて後退って来るセーラ。
続いてバロー、ミンチンが入って来る。
バロー、衣裳戸棚に行くと引開ける。
吊られている美しいセーラの服、服、服。
バロー、摑み出す。
思わず一歩出るセーラ――
バロー「フン、こんなゼイ沢な服を沢山作りおって！」
摑んだ服を乱暴に投げ込むと、扉をしめ、ベッドに行く。
バロー「それに、このベッド……」
バロー、クッションを押す。
置かれていたセーラの父母の写真が、床に転げ落ちる。
セーラ、急いで駆け寄ると、写真額を拾い、脅えて壁に退く――

バロー「それに、このドレッサーと……」
バロー、ドレッサーに行き、調べる。
バロー「（振返る）このジュータンもですな」
その時、スタンドの鳥篭で、ボナパルトが叫ぶ。
ボナパルト「セーラ……セーラ……」
バロー、ジロリと見る。
バロー「やれやれ、こいつも処分せねばなりませんな」
セーラ、はっとなる。
セーラ「それは……ボナパルトは、お父様と一緒に、インドから連れて来たオウムなんです！」
バロー、セーラを見る。
ボナパルト「セーラ……セーラ……」
バロー「フン……そんな名前しか喋れんようでは、安くしか売れんだろうが……」
云いながら鳥篭をスタンドから外す。

バロー「では、ミンチンさん……家具類は明日引取りに来させますから、それまで一切手を触れんように願いますぞ」
セーラを振返り、
バロー「それから、お前もだよ……では、ミンチンさん、行きますかな」

11 同・セーラの部屋

寝室から、鳥篭を提げたバローとミンチンが出て来る。
続いて追うセーラ——
鳥篭の中で羽ばたくボナパルト。
ボナパルト「セーラ……セーラ……」
セーラ「ボナパルト……！」
叫ぶボナパルトの鳥篭を提げて、バロー、ミンチンと出て行く。

エミリーと写真を胸に抱いて立尽すセーラ——その眼に涙が溢れる。

12 同・地下の作業場

泣いているベッキーの前に、ピーター。

ピーター「なんだって……じゃ、セーラお嬢様は……」

ベッキー、泣きながら頷く。

ベッキー「お嬢様は……お嬢様は、この学校を追い出されてしまうかも……あんなに優しいお嬢様が、そんな事になったら、私、お気の毒でお気の毒で……」

ピーター「(茫然) セーラお嬢様が……」

13 同・院長室

テーブルに鳥篭を置いたバローと、前にミンチン。
バロー「ほほう、あの娘を追い出そうと」
ミンチン「当然です。他にどんな方法があると云うんです！」

14 同・セーラの部屋

エミリーを抱いて、床に悄然と坐っているセーラ――
バローとミンチンの声がかぶる。
バローの声「しかし、私の知る限り、あの娘には身寄りもなし、さしづめあなたが引取る以外にありませんぞ」
ミンチンの声「まっぴらです！　あなたは、自分の損害だけ穴埋めして、あの厄介者を私に押しつける気ですか」

15 同・院長室

バロー「ふむ……私なら、追い出すなんてマズい事は致しませんがね」

ミンチン「まずいですって？」

バロー「左様。父親が破産して死んだ一文なしのみなし子をですな、追い出したなんて噂が立ったら、この学校の評判はガタ落ちですぞ」

ミンチン「そ、そんな……（たじろぐ）」

バロー「悪い事は云わん、あの娘を置いてやって、働かせた方が得ですぞ。利巧な子のようだし、いまに元ぐらい取れるでしょう」

ミンチン「まあ、あなたに、よくそんな口が……」

バロー「おっと、もう一つ大事なものを引取るのを忘れる所でしたよ。ま、あなたも仲々の経営者だ。うまくおやりになる事ですな。では、失礼」

バロー、鳥篭を提げて出て行く。

茫然と見送るミンチン──

16

同・馬車置場

ジャンプの首を抱えて泣いているピーター。

ピーター「ジャンプ！……お嬢様が、お嬢様が大変な事になっちまったんだよ……一体ぼくとお前は、どうすればいいんだよ」

そこへ鳥篭を提げたバローがぬっと入って来る。

バロー「おい、その小馬と馬車を表へ出し給え」

ピーター「え……でも、ジャンプはお嬢様の……」

バロー「いいから、云う通りにするんだ！」

17

同・セーラの部屋

いななくジャンプの声――

はっとなるセーラ――

18 同・表

鳥篭を座席に乗せ、御者台に乗り込むバローに、ピーターがすがりつく。

ピーター「ま、待って下さい。ジャンプはお嬢様の馬です。返して下さい！」

バロー「うるさい！……この小馬も馬車も、今日から私の物だ。お前はクビにしたんだよ、消えろ！」

ジャンプに鞭をあてると走り出す。

ピーター「ジャンプ……！」

茫然と立尽すピーター――

19 同・セーラの部屋

窓辺から、じっと見おろしているセーラ。

×　　　×　　　×

公園(スクエア)の道を――バローに鞭うたれて遠去って行くジャンプの馬車が見える。

×　　　×　　　×

茫然と見送って立つセーラ。

セーラ「ジャンプ……」

その眼に、涙が光る――

（中　CM）

20

同・院長室

腕を組んで焦々と歩き廻っているミンチン——
アメリアが入って来る。

アメリア「お姉様……セーラさんの持物まで押えるなんて、バローさんもなんてひどい事を……」

ミンチン「アメリア……あの家具は、もっと早く私たちが押えるべきでしたよ」

アメリア「えっ……」

ミンチン「そうすれば、この学校が受けた損失を少しでも取り戻せたのです」

アメリア「そんな……お姉様までセーラさんの……」

ミスチン「あの子をさんづけで呼ぶ事は許しません！」

アメリア「は、はい、お姉様……」

ミンチン「アメリア……昔、生徒が置いて行った服がありましたね。

その中から、一番ボロの服と靴を探しておいで」

アメリア「あ、あのォ……」

ミンチン「まだ判らないの？　あの娘は……」

21 同・セーラの部屋

ミンチンの声「私が誕生祝いに買ってやった高い服を、まだずうずうしく着てるんですよ！」

その服を着たまま悄然とエミリーを抱いて考えているセーラ――

22 同・院長室前の廊下

ジェームスに羽交いじめにされたピーターがもがく。

ジェームス「この野郎、一体どこへ入り込もうって気だ！」

ピーター「は、放してくれよ！　このままじゃ、お嬢様が……」

ドアが開いて、ミンチンが出て来る。

ジェームス「あ、院長先生……」

慌てて手をゆるめた瞬間、ピーター、脱兎の如く階段を

駆け上る。

ジェームス「あッ……」

ミンチン「ジェームス、一緒に来なさい」

ジェームス「は、はい、院長先生……」

23

同・セーラの部屋

飛び込んで来るピーター――

ピーター「あ、お嬢様……！」

驚いて立上るセーラ――

セーラ「ピーター……！」

ピーター「お嬢様……ジャンプを、ジャンプをバローさんが……」

セーラ、悲し気に頷く。

セーラ「有難う、ピーター……今まで、ジャンプをとても可愛がってくれたことを、感謝しているわ」

ピーター「そ、そんな……」

セーラ「それから、私のためにとてもよくつくしてくださった事にも……」

ピーター「な、なにを仰言るんです。ぼくの事なんて、どうだっていいんです。それより、お嬢様の事が心配で……」

セーラ「ピーター……あなたの気持は嬉しいけど、もうお別れしなければならないのよ」

ピーター「えっ……」

セーラ「私……私、もうこの学校には、いられなくなったの……」

ピーター「お嬢様……！」

その時、ドアが開いて、ミンチンがジェームスを従えて

入る。

ピーター「あ、院長先生……！」

ミンチン「（ジロリ）ピーター、誰に断ってこんな所まで……」

ピーター「お願いです、院長先生！　お嬢様を、セーラお嬢様を、この学校から追い出したりしないで下さい！」

ミンチン「ピーター、お前はもうセーラの御者ではないんです……ジェームス、追い出しなさい！」

ジェームス「はい、院長先生……さ、お前はもうクビなんだよ、グズグズ云わずに出て行くんだ！」

ピーターを引摺り出そうとする。

ピーター「な、なにするんだよ……お、お嬢様……」

セーラ「ピーター……！」

ピーター、わめきながらジェームスに引摺られて廊下に消える。

茫然と立尽すセーラ――

見送ったミンチンが、冷やかにセーラに眼を戻す。

ミンチン「お前に、云って聞かせる事があります……院長室に来るように」

セーラ「は、はい、院長先生……」

ミンチン、鯱って出て行く。

じっと見送ったセーラ、悲しみを耐えてエミリーに話しかける。

セーラ「判って？　エミリー……私たち、ここを出て行かなければいけないのよ」

置かれた安楽椅子を見る。

セーラ「あなたが、いつも坐っていてくれたこの椅子も、もう私たちのものではないのよ」

セーラ、そっとエミリーをテーブルの上に置くと、傍に用意しておいた黒いリボンをとる。

セーラ「さ、なくなったお父様のために、このリボンを着けて出て行

きましょうね」

そのリボンをエミリーの首にかけ、自分も同じ黒リボンを首にかける。

24 同・セーラの部屋の前

ドアが開き、エミリーを抱いたセーラがそっと出て来る。

25 同・一階の廊下

階段を降りて来るセーラ。

× × ×

離れて、そのあとから顔を見合わせながらついて来るラビニア以下の女生徒たち。

26　同・院長室の前

来たセーラ、ためらったが、ノックする。

ミンチンの声「お入り……」

セーラ、そっと入る。

×　　×　　×

たちまちラビニアたちが、どっと押し寄せて来る――

27　同・院長室

振返ったミンチンが、ジロリとセーラを見おろす。

黒リボンのエミリーを抱いたセーラ。

ミンチン「呆れた……一体なんのつもりで人形なんか抱いて来たんです」

セーラ「お願いです、エミリーだけは取上げないで下さい。一緒に連

れて行かせて下さい」
ミンチン「連れて行くって、何処へです」
セーラ、首垂れる。
セーラ「……判りません……でも、院長先生が、この学校を出て行くように仰言いましたから……」
ミンチン、吐息する。
ミンチン「世間知らずな！……お前ぐらいの娘が、このロンドンで一人で生きて行けるとでも思ってるの？」
セーラ、うつむいた儘動けない。
ミンチン「お前はね、この学校に置いてやる事にしたのです」
セーラ「え……」
愕然と顔をあげる。
ミンチン「なにをジロジロ見ているんです！」
セーラ「では、ほんとに、ここに置いて下さるんですか」
ミンチン「お前はね、この世の中でひとりぼっちのみなし子なんです

よ。お情けでここにでも置いてやらなければ、誰が助ける
と云うんです」
セーラの顔がぱっと明るくなる。
セーラ「あ、有難うございます、院長先生！」
ミンチン「但し、お前には、この学校の為に働いて貰います」
セーラ「はい、院長先生。ここに置いて下さるなら、私、どんな事で
も致します」
ミンチン「そう……」
セーラ「はい、私、ロッティたちになら、フランス語を教えられると
思います。ロッティたちも私になついていますから」
ミンチン「生意気云うのはおやめ！」
ビクッとなるセーラ――
ミンチン「お前は、明日から台所で働くのです。ベッキーと同じよう
にね」
茫然と見るセーラ――

ミンチン「置いて貰えるなら、どんな事でもすると云った筈です。私に礼を云うべきです」

セーラ「あ……有難う……ございます……院長先生……」

ミンチン「よろしい……さ、私が買った服と靴を脱いで！……この服と靴にかえるんです」

ミンチン、一方からボロ服と靴を摑み取ると、セーラの足元に投げ捨てる。

茫然と見るセーラ

――粗末な灰色の服と、破れたボロ靴。

ミンチン「昔、お金が払えなくなって、この学校を追い出された生徒が、捨てて行ったものです。今のお前には、一番似合う筈ですよ」

凝然とミンチンを見上げるセーラ――

28

同・前の廊下

窺って囁き合っているラビニア、ジェシー、ガートルード、それに、心配そうなアーメンガード、ロッティ以下の女生徒たち――

カチリ、と院長室のドアが開く。

思わず身を退く女生徒たち――

院長室から、粗末な灰色の服とボロ靴に着換えたセーラが、そっと出て来る。

一瞬、驚きの声をあげる女生徒たち。

セーラも、クラスメートたちの眼、眼、眼に、はっとたじろぐ。

アーメンガード「セーラ……」

ロッティ「セーラ・ママ……！」

駆け寄ろうとした時、院長室からミンチンが出て来る。

ミンチン「静かに！」

静まる女生徒たち――

ミンチン「セーラ・クルーは、この学校で引取ってやる事にしました」
——どよめく女生徒たち。
ミンチン「但し、台所で働くメイドとしてです。皆さんもそのつもりで」
——ざわめく女生徒たち。
ミンチン「さ、お前は部屋へ行くんです！」
セーラ、屈辱を耐えて階段の方へ歩き出す。
見送って院長室のドアに消えるミンチン。
女生徒たち、一斉にセーラについて行く。

29 同・三階への階段（夕景）

エミリーを抱きしめ、唇を嚙む思いで上って来るセーラ。
×　　×　　×
ぞろぞろと囁きながらついて来るラビニア、ジェシー、

ガートルードたち。

30 同・三階の廊下（夕景）

来るセーラ、立停る――

セーラの部屋を出たアメリアが、鍵をかけて振返り、はっとセーラを見る。

アメリア「セーラさん……」

アメリア、うろたえて弁解する。

アメリア「院長先生のお云いつけで、あなたはもう、このお部屋には入れないのよ」

セーラ、見返して、微かに頷く。

アメリア、急いで奥の扉を指す。

アメリア「あなたの部屋は、あの階段を上った、ベッキーの隣りの屋根裏部屋になったのよ」

セーラ「……知っています。アメリア先生」
セーラ、その奥の扉に進む。
——気弱そうに見送るアメリア。
扉の前で振向くセーラ——
×　　×　　×
三階の階段口に、窺っているラビニア、ジェシー、ガートルードたちの姿——
×　　×　　×
セーラ、その重い扉を押して中に消える。

31　同・階段口（夕景）

勝ち誇ったように囁くラビニア。
ラビニア「どう、これでもあなたたち、セーラのお友達なんかでいられる?」

ジェシー「そんな……私、前からセーラのお友達なんかじゃないわ」
ガートルード「そうよ、ラビニア……私たち、ずっとセーラよりあなたが好きだったんですもの、ねェ」
ラビニア、得意気な微笑——

32 同・屋根裏への階段口（夕景）

暗く、細い階段を見上げるセーラ—— のぼりはじめる。

33 同・屋根裏部屋の前（夕景）

のぼって来るセーラ、ためらったが重いドアをギギッと開く。

34 同・屋根裏部屋（夕景）

そっと入るセーラ、見廻す―― 斜めの低い天井、西日のさす窓、クモの巣の張った木箱やベッド、ガラクタの山。

セーラ、木箱に行くと、そっと腰をおろす。父母の写真を出しみつめる。耐えていた悲しみが一気に衝き上げて来る。

セーラ「エミリー……ここが、これから私たちが暮すお部屋なのよ……もう私たち、二人きりなのよ、エミリー……」

セーラの眼に、どっと涙が溢れ出る。

（第十二話　終）